

**伝承遊びを受け継ぐ取り組み
—けん玉遊びの教育的効果—
仁藤喜久子（仙台白百合女子大学）**
キーワード：伝承遊び けん玉 教育的効果

保育士や幼稚園教諭は多様な遊びの知識があることが望ましいことから、保育者養成課程では授業の中に伝承遊びを取り入れている。溝口（2012）は、女子短大生を対象に伝承遊びの経験について調査をしている。道具を使う3つの遊びについて、「経験あり」の回答は「お手玉（95.0%）」「けん玉（92.4%）」「コマまわし（76.5%）」であった。この結果から、幼児期から学童期にかけて多くの学生が伝承遊びを経験していることが伺える。

しかし、筆者も養成課程で授業を担当しているが、けん玉やこまの遊び方がわからない、できない学生が多いと感じている。「経験あり＝上手に（技が）できる」ではなく、「経験あり＝知っている・やったことがある」程度なのが現状である。この状況では、就職先の保育現場や学校等で子どもたちに伝承遊びの楽しさや魅力を伝えられないのである。この実態からけん玉遊びに着目をし、2014年は保育者養成課程におけるけん玉遊びの取り組みについて報告をした。また、2015年はA区保育士講習会での取り組みとA区立保育所での取り組みについて報告をした。そこで本研究は、「けん玉」教材の教育的効果について、幼児教育（保育内容5領域）と初等教育（各教科）で検討し報告をする

**幼児期におけるコーディネーション能力の特徴
武庫川女子大学 長岡雅美**
キーワード：幼児、運動能力、コーディネーション能力

【研究目的】最近の子どもの体力・運動能力低下の現状を踏まえると、動きの獲得の困難さや動きそのものに現れる問題の原因を客観的に示すことが、幼児期の発育発達研究にとって重要な知見となりうる。本研究は、運動能力の基本あるいはその前提となるコーディネーション能力に着目し、それらを構成する要因が運動成果にどのように影響するかを明らかにすることで、幼児期におけるコーディネーション能力の発達の特性の全体像を描くための基礎データを得ることを目的とした。

【方法】兵庫県及び愛知県の私立・公立保育園男児193名、女児193名、計386名を対象とした。測定項目は、MKS運動能力検査6項目及びMotorik-Tests(K Adler, G Senf, 2009)4項目の計10項目とした。分析には、運動成果に及ぼす運動能力とコーディネーション能力の関係性を明らかにするため共分散構造分析を用いた。

【結果】コーディネーション能力が総合的運動課題の成果に影響を及ぼす仮設モデルは妥当なものであることが示された。本研究で設定した総合的運動課題については、捕球やボールの操作などの能力が運動成果に大きく影響する結果となった。